

坂の上の星雲

西郷 西盛

「タダならば・・・」

と、多くの国がそれを歓迎した。世界中でちょっとした海上都市建設ブームというべきものが起きた。

※ 予告では、第三話は「空間騎兵」という題でしたが、書いていくうちに、当初の予定と違い、空間騎兵のはなしまで行きませんでしたので、題を変えました。【空間騎兵】は四話にまわすことになりました。つつしんでお詫び申し上げます。

古代家が三浦半島に住んでいたのは、神代計画の本部が騒音問題対策

などで東京湾外海上都市群に本部があつたというのが大きな理由である。

三浦半島沿岸には、海上都市群の西の玄関口ともいべきG-1一号海上都市、通称「練馬海上都市」があることはすでに述べた。この都市の建設を当時の巨大企業である練馬重工業が担当したのが通称の由来である。建設した企業の名前が通称につく例は多く、他には、南部海上都市、揚羽海上都市、遣田海上都市、幌居海上都市などがある。

そもそも海上都市の建設は、二二二九年にヨーロッパ連合、イギリス州出身のゼルバードが海洋開発のための海上都市建設の必要性を世界にうつたえたことに始まる。彼の本心は別にあつたのだが、表向きには「せまい地表に人々がしがみついているから争いことがおこるのだ。地表の七割をしめる海洋開発こそ人類の平和と未来があるのだ。」と、ゼルバードはそのためのノウハウの無償提供まで申し入れた。

第一回 狂想曲

黎明編

第二話 別な話

大東亜諸国連合における海上都市の計画は、二二三二年に日本州出身の沖一郎の強力な指導で建設がすすめられた。沖一郎の父親は第二次世界大戦中の日本防衛海軍造船中将で、先に述べたミサイル戦艦真秀場を設計した沖重造である。

沖家というのは四代続いた海洋一家で、船舶設計者の専門家を数多く輩出した。沖一郎も船舶設計が専門であった。そのため日本の海上都市の基本設計は島岡漣と海野広の二人の若手科学者が共同で担当した。余談になるがこの二人には多くの逸話がのこされている。

第一号海上都市の完成間際に爆弾テロがあり、その後に島岡漣が失踪したのだ。どうせん漣が犯人だと疑われた。

当時、世界に先がけて太平洋上に海上都市を建設したネオ・ムー帝国が、世界の海を支配するために各国の海上都市にテロ攻撃をかけていた（と疑われていた）ため、漣もネオ・ムー帝国の工作員ではないかと噂された。漣を信頼していた（というよりも惚れていた）広は漣のふるさとの西海道（九州地方）は鹿児島県の指宿までたずねていった。彼女の祖父母にあつたようだが、結局ひとりで帰ってきた。

三年後、広は第一号海上都市に「マリンパレス」と名づけて失踪した。

広の友人で第四代海上都市群統合知事となつた山盛正^{やまもりただし}がその晩年二人の消息について語つている。

「漣さんは、事件のあとネオ・ムー帝国のやりかたがイヤになり、お母さんをたよって地球を離れたんだ。木星の衛星ガニメデ開発をしていたのさ。広も二年後に木星にいったのさ。え、広は何のために木星にいつたかって？そら、漣さんをおいかけてにきまつてゐるさ。そこで広は海

洋学のノウハウを生かしてガニメデを始め衛星エウロパやカリストの氷底海^{ひょうていかい}の開発をしていたのさ。その水を太平洋合衆国^{テラフォーミング}の火星地球環境^{いんげん}改造に利用するためには、今日火星に海と緑があるのは広と漣さんのかげつてわけさ。」

と、ひとつ話のようすに語つていた。もちろん、当時はあまりにも飛躍した話だったためにだれも信じていなかつたのだが・・・。

ところが後年、ガミラスの遊星爆弾攻撃により海が干上がり、最盛期には数百を数えた海上都市群が壊滅した後に、「もう時効だらう」と、広が自分の子孫にだけ読ませようと書き残した回想録を「マリンスナーの伝説」という題で世に出したために、今では山盛正の話が本当だつたことが知られている。もちろん、この物語の時点ではまだ知られていないなかつたことである。

漣の母親は木星開発に生涯をささげた日系太平洋合衆国人一世のナミ^{菜美}・イザ^{伊座}であることはいうまでもない。ナミは地球を離れるに当たり、すべての未練をたちきるべく幼い漣を母の実家である指宿の島岡家に養子にだしていた。テロ事件を知り、極秘裏に漣をガニメデに呼びよせたのである。

守^{もり}さんのころの大東亜諸国連合の学制は、小学校六年、中学校二年の合計八年間が義務教育である。十四歳で義務教育が終わる訳だが、そのまま社会に出る子供はまれで、多くは高等学校（以下高校）と高等学^{じょうこう}校（以下上校）へ進学する。

高校は大学進学をめざし、学問的内容中心の学習である。上校は就職あるいは上等専門学校（以下上専）進学をめざし、学問的内容以外にも学術、技能などの実技的内容がカリキュラムに多く入つている。大学と上専の違いは、大学は学問研究を中心の研究機関で、上専は学術中心の実践機関である。医者を例にとれば、病気の原因、治療方法などの医学を研究するのが医科大学で、実際に治療にあたる医者を養成、いわゆる医術を教育するのが医科上専である。もちろん、上校や上専から大学、高校や大学から上専に進学するものもあり、人生のコースはさまざまだ。

あつた。

一二一世纪に、中学校卒業後に高校と上校に分けたのには理由がある。

一〇世纪後半から一一世纪にかけて、東部亞細亞地区（當時の中華人民合衆国十極東歐羅西亞共和国を除く大東亞諸国連合）において大学への

進学が豊かさへのパスポートだった（と考えられていた）。そのため、当

時の高校は大学の予備校になりさがつてしまつた。の大学はとすると、研究機關と就職のための学術機關の分化がからなずしも明確になつていなかつた。結果として嫌惡なく学問研究の予備軍に全ての子供がされてしまつたのである。そのため記憶力と数学的処理能力のある人間が上位にたつという現象がおこつた。（これは太古に中華地域を中心に行われていた科挙の影響かもしれない）

どうも学問には興味が持てない、あるいは向いてないという子供たちは悲惨であつた。自分の得意分野での競争をいられ、結果多くは敗者となり必要以上にコンプレックスをいだくこととなつた。その鬱屈したエネルギーが多くの学校で反社会的行動となつてあらわれた。いや、むしろエネルギーを爆発させることが出来た者はあるいはまだ良かつたかも知れない。経済発展と共に多くの国で少なからずの生徒がドロップアウト——登校せずにひきこもつたりした。学校教育が崩壊の危機にだつたわけだ。

これをなんとかせねばと、さまでまな小手先の改革と大きなゆりもじしを数多くへたあとに

—— ようは学問以外の価値観をしめせば良いのだ——
と結論づけた。高等学校を学問と学術を分けて上等学校が設置された。

一五歳で練馬重工業が創立した練馬大学附属海上都市高校に進学した守さん」と古代守が小笠原海上都市の海底遺跡発掘スタッフのアルバイトをはじめたことはすでに述べた。日本海溝について伊豆・小笠原海溝でも「ゼスの海底遺跡」が発見された。この宇宙考古学における新たな発見の発掘スタッフに採用されたのである。

3

余談になるが、ここで守さんの叔父、古代守翁が提唱した宇宙考古学について述べてみる。

宇宙考古学のはじまりは、一二三六年のナミ・イザによるガニメデ遺跡の発見である。ガニメデ基地から知的生命体が建造したと思われる遺跡のような写真を送つてきたのだ。もつとも当初は自然岩が偶然人工物に見えるだけのようにも感じられ、多くの科学者は——自然が作り上げた偶然——と切り捨てた。

そんな中で当事二八歳の新進氣鋭の考古学者であった古代守翁（もちらん当時は若かつた）がいち早く地球と宇宙の関係を太古から研究する

必要性を訴え

「宇宙考古学」

を提唱した。この説は当然学会から無視され、守翁は学会から追放された。職をおわれた守翁は極貧にあえぎながらも研究をつづけた。

研究といつても、直接ガニメデまで調査にいけるはずもなく、各地の神話・伝説や二〇世紀ころから宇宙人来訪の証拠などといわれていた、いわゆるオーパーツの再検証を行う程度のことしかできなかつた。

自身はめまぐるしく、それも守翁の有利なように動いて行つた。二二三八年に地球と木星の間にある小惑星の仲間と思われる準惑星オルパークスを日本所属の探検隊である。守さんの祖父のハーロックと森明もりあきらのチームが発見し、そこでも遺跡が発見された。さらに、二二四一年にはエウロパの氷底海で、翌二二四二年にはカリリストでもアメリカチームによって海底遺跡が発見されたのだ。（公式記録では消されているが、「マリソンヌーの伝説」によれば海野広のチームが発見したとされている。あらたな研究が待たれるところである。）

この後の展開は劇的でさえあった。さうそく探査チームが組織され木星宙域に派遣された。ノノで、いちはやく「宇宙考古学」を提唱しつ

たん学会から追放された守翁がそのメンバーに選ばれた。

調査の結果、おおよそ一万二千年前の遺跡であることがわかつた。

その後も発見は相次ぎ、二二四八年には準惑星セレスでも発見された。

——はたして遺跡を造つたのは地球外知的生物なのか——

という疑問がこのころの宇宙考古学最大の関心事であつた。なんとも不思議なはなしだがいくら調べても化石など遺跡を造つたと思われる知的生物そのものの痕跡がまったく発見されなかつた。そのためこれらの遺跡はなんらかの理由により短期間の滞在が目的ではなかつたかと考えられるようになつた。

もちろん、他の星系から太陽系探査などのための来訪者が滞在したのではないか。などという意見もあつた。ただ、このような意見に対しては——それならば、当事の人類との接触はなかつたのか——という当然の疑問に明確に答えられるものもなかつた。一部には接触した痕跡のようなものを遺物のなかからむりやりこじつける者もいたが説得力はなかつた。また逆に、地球から飛び立つた知的生命体がいたのではないかと考える研究者もいたが説得力はなかつた。

なにぶん一万二千年前といえば、人種がやつと農耕らしいものに手をつけたくらいのところで、メソポタミアやエジプトにはじめて文明といわれるものが勃興するまでさらに数千年を待たねばならない時代である。

記録など残っているわけもなく、このまま迷宮入りかと思われた。

そのような状況が大きく変わったのが日本海溝での海底遺跡の発見である。この遺跡の特徴はガニメデなどのものときわめて共通点が多く、なにより遺跡の主とも言つべき知的生物の化石まで出土した。その生物はDNAの調査の結果、われわれ現生人類ホモ・サピエンスとほぼ同じ哺乳類靈長類目ヒト族に属する生物であった。

その後の詳しい研究により、平均身長一八〇厘米、体格はわれわれよりがつしりした頑丈型ホモヒト族に属し、脳容積は我々の平均値（約一三五〇cc）を上回る約一四五〇ccもあることがわかった。現在知られている化石人類の中では、頑丈型新人、いわゆるネアンデルタール人に一番近いことが確認された。ネアンデルタール人とは華奢型新人とも呼ばれる現生人類の最も近縁種といわれる人類である。

この海底人類は靈長類としては海棲新人ホモ・マリニシスと名づけられた。ただ、文字とがわかった。以下は彼らのことと「ゼス」とよぶこととする。

資料などの研究から彼らは自分たちのことを「ゼス」と総称していたこと、読者諸兄には釈迦に説法と苦笑されると思われるがここで人類の進化の概略をおさらいしてみる。

イピテクスなど)が類人猿から進化したのは周知のことである。彼らは人類最大の特徴のひとつである直立二足歩行を始めた。四百万年前ころに華奢型猿人アラストロピテクスへと進化し、より安定した直立二足歩行と、樹木や骨を使った道具を手に入れたと考えられている。三百万年前ころにアフリカの乾燥化が進み、食糧不足からそれまで食べられなかつた硬い木の実なども食べられるように進化した頑丈型猿人バランクトロブスと、今まで行ってこなかつた肉食(雜食)をはじめ、最初のヒト族と呼ばれる原始原人に枝分かれした。その後も人類は進化を続け、二百万年前ころには原人ホモ・エレクトスが誕生し、高カロリーの肉食は人類に劇的な進化をうながした。脳の巨大化である。七〇万年前には旧人ホモ・ハイデルベルゲンシス（一〇世紀頃にはネアンデルタール人を旧人と呼んでいたが、今日ではホモ・ハイデルベルゲンシスを旧人と呼んでいる）に進化し、二五万年前ころに頑丈型新人と華奢型新人に枝分かれした。

ネアンデルタール人は体格もわれわれよりもすぐれていて、脳も大きかつたが、さまざまな遺跡の研究からわれわれより知能が低かつたようである（石器の精度などから推定）。脳の大きさと知能の高さは単純に比較できないようである。かれらは、当事の寒冷地であるヨーロッパからシベリア、モンゴルあたりに多く分布していたが、二万年前ころに、イベリア半島での遺跡を最後に絶滅した。ちなみに、ネアンデルタール人

の名前の由来は、最初にその化石が発見されたドイツのネアンデル渓谷

タール

からである。

合わせて独自の説を構築した。どのよな説かは後に詳しく述べるのでここではふれない。

古代守翁もこの、こう太古の地球の記録をあさつていた。このとき、初めて宇宙考古学を提唱した、ころの不遇の時代の研究成果が生かされたのは皮肉なはなしである。やつとみつかったのが古代メソポタミアの石版に書かれたシュメール神話であった。ゼカリア・シッチンが唱えた惑星「ニビル」仮説である。

シッチンは二十世紀から二十一世紀に活躍したアゼルバイジャンはバクー生まれのペレスチナ育ちの考古学者である。彼のシュメール宇宙論の解釈の概略は以下のとおりである。「三六〇〇年周期の橈円軌道をとる惑星「ニビル」が火星と木星の間にあつた惑星ティアマトと衝突し地球や小惑星を形成した。ティアマト人の遺伝子操作によって、原人から現生人類が生まれた。」というものである。もちろん当時の人々の多くは相手にしなかつたトンデモ説である。

古代守翁は、シッチンの説を基礎として、プラトンのアトランティス伝説やマヤ文明のトロアノ絵文書、ヒンドゥー教のナーカル碑文。さらにはシュメール神話の――文明は海からもたらされた――という伝説や、ノアの箱舟の元となつたとも言われる大洪水伝説などを組み

話を守さんにもどす。当事の宇宙考古学研究所所長は、古修司といつて、元々石器時代の古代美術の研究が専門であった。古代守翁に触発され宇宙考古学にくら替えしたのだ。後にはプロメテ計画に便乗して太陽系外にも調査を広げることになるが、そのことには深くはふれない。

直接守さんの上司となつたのは、遺跡発掘責任者である宇宙考古学研究所副所長の三本足進である。この人は、守さんの叔父の古代守翁の直接の弟子だった人であり、古代進の名前のもとになつた人であることはすでに述べた。

――師匠と同姓同名の高校生がアルバイト応募の中にいる。小論文を読んだ限りではかなり優秀である。――

という報告をうけた三本足が、なんとなくなつかしみを感じて採用した。ところが

「宇宙考古学を提唱した古代守は自分の叔父です」

ということではからずも師匠の身内を持つことになつてしまつた。運命とは不思議なものである。

まことにもうしわけないことだが、またまた余談となる。(物語当事の世界の状況を知つてもらわないと今後の話の内容がつかみにくいので今回、勘弁ねがいたい・・・)

三本足進と古代守翁の出会いは二一六三年のアフリカである。

このでありますについては、三本足の回想録「宇宙考古学事始」第一章の「サケザン」や、いきががりでサケザンの使者をつとめ宇宙考古学にも深くかかわることとなる物野分もののがじめが書いた子供向けの伝記「古代守先生物語」の中の「サケザン皇帝の巻」に詳しい。二人の著述は大筋では同じだが、細部には違ひも多い。理由はわからない。

アフリカ
という、二十二世紀になつてもなお未開のジャングルが多く残るこの地域は、中南米とならんで遺伝子ハンターたちの恰好の狩場となつていた。

製薬会社が新しい抗生物質を開発するときには、その元となる新種の遺伝子を入手しなければならない。土の中の細菌や新種の昆虫、猿など動物の肝臓などを集めてきては、病原菌やウイルスに対する抗体などを調べ、見込みがありそうなものをさらに厳選して新薬とする。新型の抗生物質を開発すれば数百億リング(当事の通貨単位。二十一世紀初頭)

ろの日本の円と同程度の価値)規模のビジネスとなるから、世界中の製薬会社がこの宝探しに専門の人員を雇つてゐる。この者たちを遺伝子ハンターといつた。

大学で遺伝子工学を学んだ三本足進は腹立はら立ち製薬につとめていた。契約している遺伝子ハンターたちから有望な遺伝子かどうかを見極めて買いたる仕事をまかされていた。本人は、生物の進化の秘密をさぐるような研究がしたかったのだが、ちょうど不況の時期では生きるために贅沢はいつてはいられない。

7
アフリカにやつてきた三本足が、中南部アフリカ連合エチオピア州のアディスアベバからガボン州のリーブルビルへ移動のチャーター機がトゥルカナ湖を越え、ウガンダ州とコンゴ州の境あたりのジャングルへ強行着陸したことがあつた。このチャーター機のパイロットはハラマラド・メメドライロ・ナニハラジヤランドラという元黒人解放運動のゲリラであつた。この機には三本足以外に二組四人の便乗者がいた。一組目は古代守翁と物野分けじめであつた。もう一組はヨーロッパ連合イギリス州出身のジェーンとヤルボイのサセソーネ母子である。この二組は最終的な目的は違うのだが目的地は同じであつた。どちらもトウルカナ湖近くのジャングルへ行きたかつた。古代守翁とジェーンが共謀してこの強行着陸を決行させたのだが、方法はいたつてシンプルであ

る。ハラマラードにジエーンが

「主人が眠る土地をひと目みたいので着陸していただけないかしら」と涙ながらに哀願するというものだった。人情にあつく涙もろいハラ

マラードは大いに同情して強行着陸となつた。もちろん三本足はカンカンに抗議した。古代守翁は

「情けは人のタメならず。どうせ、あなたの金じやあるまい。会社の金じやる。広く言えども大日本株式有限会社の金じやる。してみりや、これも外交の一環とおもえばいいのじや」

などとなぐさめてみたが、なかなか納得しない。なぜジエーンのダン

ナがこんなジャングルに眠つているのかなどしつゝくきくから、当事十五歳のヤルボイが

「ネホリハホリきくやつはモテないぜ」

と、ませたことをいった。三本足は

「コブつきにもモテたつてしかたがない」

と、うそぶいたが、古代守翁が

「バカメ、おまえ、子供一人ぐらゐ産んだ女のほうが色っぽくてきれいなもんだ。しかしチミ。ありやーいい女だよ。わしがもう少し若ければああいう女ならコブつきでも結婚したいものだね

と、はぐらかして、三本足もそれ以上は言わずあきらめた。たしかに

ジエーンは当事三十代後半だったはずだが、残つてゐる画像を見るがぎり二十代前半でも十分通用する美しさだった。

ジャングルに着陸してからが大変だつた。チャーター機が新種の類人猿に襲われたのだ。一見すればチンパンジーに似てゐるが、身長は一四〇センチとチンパンジーより大柄で、完全な直立二足歩行を行い手には棍棒までもつていた。その姿は猿というよりひとに近く、類人猿というよりむしろ類猿人とよんだほうがその生き物の本質に近いと思われる。

三本足たちは応戦したが、多勢に無勢でチャーター機は破壊されてしまつた。類人猿たちの目的は、ハラマラードが便乗してチャーター機で密輸しようとしたウイスキー二十ダースの強奪であつた。おかげで全員かすり傷程度ですんでいた。

とにかく三本足一行六人はサバイバル生活を余儀なくされた。このときハラマラードがゲリラ時代につちかつたサバイバル術がおおいに役立つた。ただ「サケザン雷帝」では物野本人が食料となる獲物を自分がよく採りにいかされたと、サバイバルの功績は自分にあると書いてゐる。思ふに、ジャングルから脱出したのちに、頼りがいを感じたジエーンがハラマラードと再婚したことから考へると、ハラマラードの活躍の方が正しかつたように思われる。あるいは、物野が獲物を探つてきたのは最初の遭

難の時（後にものぐるが物野はトゥルカナ湖近くのジャングルで二度遭難している）のこと、記憶があやふやになっていたのかもしれない。

数日して類猿人の王様があらわれた。その王様こそ文化人類学者のサケザン・サセソーネである。（物野は類猿人たちの王であり、類猿人たちの激しい襲撃の記憶から「サケザン雷帝」という章タイトルを思いついたと回想している）

そこではじめてわかったのだが、サケザンは十二年前に野生のチンパンジーの生態観察を目的に一人でジャングルにやつてきた。自給自足の生活で、外部との通信手段もろくにもたない世捨て人のような生活をしていた。実はジエーンはサケザンの奥方で、夫が研究に没頭しすぎて家族をかえりみず十年以上も音信不通なのにたまりかね、息子のヤルトイをつれてここまで訪ねてきたのだ。

いっぽう古代守翁は

——宇宙考古学に関係すると思われる重大な発見をした。現地に来て意見を聞かせてほしい——

と、サケザンから連絡をうけて、文字通り飛んできたのである。たまたま現地に墜落した飛行機のたつた一人の生き残りである物野をサケザンが助け、そのお礼にと古代守翁への使者を引き受けたのである。守翁がアフリカは初めてだつたために物野にガイドをたのんだ。物野は

「これも何かの縁」

と、快諾した。サケザンのたのみといい、古代守翁のたのみといいどちらもなかなか無理な要望と思われるのだが、きちんとひきつけになしたところから物野の人柄の一端を知ることができる。

9
サケザンが発見したのは、後に化石円盤第一号とよばれる」ととなる太古の昔に飛来した宇宙船の遺跡である。化石円盤はトゥルカナ湖近くのジャングル奥地の約三〇〇万年前の地層に埋まっていた。当地にチンパンジーの研究に訪れたサケザンは、まさかこれが宇宙からの飛来物とは思わず、第二次世界大戦中の兵器かなにかだらうと思つていた。発見当時に朽ち果てた内部をいじつてみたら、一瞬作動して、淡い光とキーンという超音波のようなものを放射したあと永久に沈黙した。それにして

も、化石円盤だったから良かつたものの、爆弾かなにかだつたら死んでいたのにとりあえずいじつてみるといのはいかがなものかと思う。たいした度胸というか何というか、サケザンという人物は我々にははかりがたいところがあると思うのだが読者諸兄はいかがであろう。

その後、化石円盤は打ち捨てられていたが、おかしなことが起こりだした。新しく産まれたチンパンジーに直立二足歩行をするものがチラホラ表れだしたのだ。また、その他にも一足歩行を行う恐竜のようなトカ

が現れたりと周囲の生物が急激に進化したとしか思えない現象が次々

とおこつた。観察を続けた結果、あのときの光と音波が原因ではないか
と思い至り、化石円盤による人工進化ではないかと結論付けた。そこで、

こういうことの世界的権威である古代守翁に連絡したというわけである。

つちがいいというの」

と、おどすように帰宅を迫つた。サケザンはしばらくの沈黙のあと

「サケの方がいい」

と、いいきり、離婚届にサインした。

化石円盤の調査のための一時はしばらくサケザンとジャングルで生活
した。ジャングルでの生活は意外と快適なものであった。ぐだんの類猿
人たちが、サケザンの命令には絶対服従で生活の世話をしてくれるのだ。

チンパンジー以上の知能を持つ彼らは、サケザンの指導により、簡単な

農耕や牧畜も行つていた。先に述べた恐竜のようなトカゲも飼育されて

いたので、つぶして食べてみたら鶏肉のような味がして美味であったそ
うである。また、新鮮な果実や、それを発酵させたアルコール（これが
まことのサル酒か？）もあり、特にこのサケを好んでいたサケザンが自
宅に帰りたくない気持ちもわからではなかつた。

調査もおわり、いよいよ文明社会へかえることとなつた。飛行機が壊
れてしまつたために、いかだを組んで川を下ることとなつた。いざ、出
発の日になつて事件がおこつた。サケザンが一人残ると言つたのだ。

ジェーンが持参した離婚届を盾に

「わたしとサケどちらがいいの。千匹の類猿人やサル酒との私ども

エテ公

10
と、一人で残る」ととなつた。

このとき、サケザンの自由奔放な生き方に感銘をうけた三本足進は、
帰国後会社を辞めた。（もつとも、化石円盤の発見により、遺伝子工学が
劇的に発展し細菌やウイルス治療の抜本的な変化が起こり製薬会社の多
くは淘汰され、腹立製薬も倒産することになるのだが）自分のやりたい
ことをやろうと古代守翁に弟子入りし、重主に宇宙考古学の遺伝子解析
分野で研究のサポートを行つたのは周知の通りである。

古代守翁の帰国後、化石円盤はすみやかにジャングルから運び出され
て全地球的国際研究団によつてすみずみまで調査された。全地球的組織

で調査されたのは、史上初の地球外知的生命体の発見の成果を、一国または一連邦国家が独占したら紛争のもとになる。と古代守翁とサケザンが話し合って決めたことであった。

調査の結果、たしかに特殊な放射線を発して生物のDNAに影響を与えて進化をコントロールすることも可能な装置ではないかと報告された。なにぶん三〇〇万年という年月は化石円盤に多大なる腐食と崩壊をもたらしていてもはや修復は不可能であつた。(もつとも老朽化がなくても当時の地球の科学技術で修復できたかはあやしいが・・・)

しかし、完全ではないとはい、当事の地球にとつていわゆる超水準技術の入手は遺伝子研究や通信分野などで飛躍的な進歩をもたらした。特にその推進機関の仕組みの一部が解明され、ぐぐく原始的ながら波動エンジンらしきものが開発された。核融合エンジンなどを駆使して何とか光速の二割程度の速度しかもたなかつた宇宙船が、一気に光速の六七割程度まで出せるようになり、神代計画はじめ各地域の宇宙開発の発展に大いに貢献したことはすでに述べたとおりである。

古代守翁はこの発見から三年後に「宇宙考古学概論」を世に出した直後に病に倒れ帰らぬ人となつた。その論旨をこゝで簡単に述べておく。

三〇〇万年まえにどこかの星。おそらく銀河系内の星の知的生命が銀河系内、あるいはもつと広範囲に化石円盤を派遣し生物が存在する星に知的生命を進化により産み出そうとした。理由はおそらく、自分たち以外にも知的生命体の仲間がほしかつたのである。

方法としては、おそらく人工的進化によつて何百万年もかけて、その星の知的生命に近い生物をつくろうとしたのだろう。だから、星ごとに進化の特徴の違い（肌の色、指の本数、大まかなサイズ、耳、鼻、首などのパーセンテージ）はあれど、基本的に遺伝子的に近い、いや同種といつてもよいDNAを持つ知的生命に進化した。（あるいはお互いの交配も可能かもしれない）このような知的生命が銀河とその周辺の伴銀河に多数存在するはずである。

地球では、この知的生命体が二種類表れた。ひとつはわれわれ現生人類。もう一つが頑丈型新人である。

二十数万年前にほぼ同時機にアフリカのトゥルカナ湖周辺のジャングルで進化した兩者は共存共栄を図れなかつた。現生人類の繁殖力と攻撃性が強すぎて頑丈型新人を圧迫し始めた。もともと争いを好まないネアンデルタール人（ホモ・サピエンス）は、もともと争いを好まないネアンデルタール人（ホモ・サピエンス）は現生人類と生存競争をさけ、アフリカを出て現生人類のいない極寒のヨーロッパやシベリアに適応して生き延びた。平和な何万年かの後、現生人類の繁殖力はついにアフリカを出でて、ヨーロッパや

シベリアにまで進出してきた。**頑丈型新人**はさらに辺境に追いやられ、

ネアンデルタール人

氷期には水位の下がった。現在の大西洋にまで住み着いた。一萬年ほど

前に氷期が緩和のされ、そのため海面上昇がおり海の孤島にとりの

こされた**頑丈型新人**は次第に沈みゆく大地を前に生活の場を海に移す

ことを決断した。**海棲人類**の誕生である。海への適応が彼らに劇的な変

化をもたらした。もともと脳容積が**現生人類**より大きかつたことはすで

に述べていたが、海中生活が知能の発達をうながした。**科学文明**を**海棲**

人類の方が遙に早く発展させ宇宙にまで進出するようになつた。それが

1万2千年ほど前のことである。彼らは**陸上人類**とも交流があつたので

あらう。これらがシユメールの海から文明がもたらされた伝説や、アトランティスやムーなどの海中に没した文明の伝説となつたのである。

ゼスたちはよほど争いを好みない平和的な人類だったのだろう。彼ら

は、いざれ同等に科学文明を発展させるであろう**陸上人類**との**軋轢**をお

それ、他の惑星への移住を決意した。その惑星はおそらく表面を水で覆

われ、恒星から遠いところでは表面が凍り、内部は地熱などの影響で液

体化した氷底湖がある惑星であろう。その星の名を仮に**アクエリアス**と

する。(当初、古代守翁はシッチンに敬意を表し「ニビル」と名づけよう

と考えたが、「ニビル」は農耕神マルドウクの取り巻きで水惑星の名前に

なじまないと考え、「みずがめ座」のラテン語読みの「アクエリアス」に

した。)アクエリアスはおそらく地球に水をもたらし大洪水伝説をのこしたのである。

これが「宇宙考古学概論」の概略である。古代守翁は最後に

「ゼスたちは、太陽系を通過するアクエリアスの観察や移住用の基地としてガニメデなどに遺跡を残して去つていった。アクエリアスの軌道は不明だが、いつの日か太陽系に帰つてくるだろう。そのとき二つの人類が友好的に再会できることを強く願いたい。」

という言葉でしめくくつている。

12

おそるべき洞察力である。わずかこれだけの証拠をもとに、ほぼ正確に事実を導き出していたのだ。この同種のDNAをもつ知的生物を今日では「ダナサイト」と呼んでいるのは周知のとおりである。水惑星「アクエリアス」も一九三〇年に発見され約一万二千年周期の遊星である」とが確認されている。古代守翁の最後の願いは、二〇〇〇年に半分はかなえられ半分はうらぎられることとなるが、いいでは深くはふれない。

第三話 了